

第1部 「ヨーロッパ人の幻想と黄金色に輝くウパオン・アスーの楽園」

コミッサオン・チ・フレンチ 「ウパオン・アスーの島に現れた魔法の蛇とトゥピナンバー族の戦士たち」

振付 ファビオ・チ・メロ

トゥピナンバー族に伝わる伝説の魔法の蛇、それが今、現実となったのか。ウパオン・アスー(大いなる島=マラニャオン島)を沈めてしまうのか。戦士たちは震えながら身構える。

メストリ・サーラとポルタ・バンデイラ(第1ペア)

セウミーニャ・ソヒーゾとクラウデーニョ

「トゥピナンバー族の素晴らしき大地」

原住民であるトゥピナンバー族は、勇敢な戦士であり、伝統、ルーツ、裸族の真の富を受け継ぐ者たちである。

第1アーラ 「まつろわぬ裸族トゥピナンバー」

サンルイス、往時のウパオン・アスー、には原住民がいた。そこにはトゥピナンバー族の何百もの人々が暮らし、外国人の侵略に対して勇ましく抵抗した。

第2アーラ 「野望を抱いて海からやってきた3つの王国」

強欲と野望を動機として、フランス、オランダ、ポルトガルが海を渡った。サンルイスには、フランス人が基礎を置き、オランダ人が侵略し、ポルトガル人が入植した。

第1山車(アプリ・アールス) 「ヨーロッパ人の幻想と黄金色に輝くウパオン・アスーの楽園」

ヨーロッパの3王国は、希少な鉱物が溢れる純金で出来た大地と期待して、いわゆる新大陸にやってきた。

第2部

第3アーラ 「ヤシの木が生える魅力的な大地」

初期の入植者たちは、ヤシの木が金で出来ているのではないかと想像した。マラニャオンには余りにも多く自生しており、ゴンサウヴェス・チアスの詩でも言及された。「オレの田舎にはヤシの木がある。そこではウタツグミが歌う。」

第4アーラ 「奴隷にされた王族たち」

アフリカの黒人を取り扱った奴隷貿易は、王、女王、王子、王女らにも、過酷な運命を強いることとなった。美しく、自由で、勇敢な人々が、サンルイス市の構築のための手足として働かされたの

だ。

第5アーラ「悲しき枷」

奴隷使いたちは、アフリカからやってきた黒人たちに容赦のない仕打ちを繰り返した。

第2山車(前半)「波間に揺れる苦痛の嘆き声」

アフリカから、何千もの黒人たちが、サンルイスの植民活動のために連れてこられた。彼らの身体は隷属させられたが、彼らは、心、魂、信仰の中に自由をもち続けた。

第6アーラ「アフリカ系の訛の市場」

サンルイスの建設に従事して力強く働いた多くの奴隷たちにもなって、様々なアフリカ系の訛がもたらされた。

第2山車(後半)「死の船で運ばれた奴隷たち」

奴隷船は死の船とも呼ばれた。船室の環境が劣悪で、多くの奴隷たちが航海の途中で命を落としたためだ。

第3部「謎の聖地信仰—聖俗の連合」

第7アーラ「聖人の祝祭—聖なる人々の祈り」

聖人・聖霊を奉る信仰形態は、17世紀のポルトガルからの植民者によってもたらされたが、以後、今日に至るまで、アフリカ系の信仰団体でも執り行われている。鳩をシンボルとしていること、そして明るい色使いであることが共通している。

第8アーラ「聖マルサウ—聖人の祝祭」

聖マルサウの祭りは、サンルイスで80年間行われており、ブンバ・メウ・ボイのグループがイヴァール・サウダーニャ広場に集まるようになったきっかけでもある。

メストリ・サーラとポルタ・バンデイラ(第2ペア)

ダヴィ・サビアーとジャナイウセ・アジャーニ

「ビコ・ビリーコ——おしゃれな小聖人」

第9アーラ「聖ビリベウ——暗闇の小聖人」

聖ビリベウは、病気や迷子のペットを救ってくれる聖人。奇跡を起こす者としてマラニャオンに知れ渡っている。

第10 アーラ 「セバスチアオン王の行幸」

マラニャオンの伝説では、聖ジョアオンの祭りの時期の夜に、ポルトガルのセバスチアオン王の幽霊が浜辺にやってくるという。

第11 アーラ 「ルイス王(ルイ13世)ー精霊信仰に生きるフランス王」

アフリカ系・インディオ系が融合した精霊信仰の中では、フランスのルイ13世の人気も高い。同王の名前は、マラニャオンの州都サンルイスの起源でもある。

メストリ・サーラとポルタ・バンデイラ(第3ペア)

アンドレジーニョとナニーニャ・フィデリス

「ヴオドゥン信仰の全ての魔術」

第12 アーラ 「ヴオドゥン信仰の神髄」

アフリカのエウエ／フォンに起源をもつヴオドゥン神への信仰は、黒人奴隷の導入に伴って拡がりを見せた。マラニャオンではヴオドゥン信仰はカーザ・ダス・ミナスと呼ばれる礼拝所で行われる。

デスタッキ・ヂ・シャオン ジェケリーニ・ファリーア 「アゴチメー——祈禱師の女王」

黒豹はダホメ系のヴオドゥン信仰におけるトーテム・シンボルであり、祈禱師の女王アゴチーミを表すものとして使われた。

第13 アーラ 「祈禱師の女王アゴチメーによる礼拝の儀」

ナン・アゴチメー、ダホメの女王、黒きミナは、19世紀にサンルイスに、ジェジェ・ヴオドゥンの礼拝場であるカーザ・ダス・ミナス、別名ケレベタン・ヂ・トイ・ゾマドヌを設立した。

第14 アーラ 「精霊の使者」

精霊信仰の盛んなマラニャオン州サンルイス市には、霊媒師が精霊の言葉を伝える礼拝所が多く存在する。

第3 山車 「奉獻の秘儀の聖地」

精霊信仰は民衆の暮らしの中にもみられる。バトゥーキの中に、強い祈禱の中に、ヴオドゥンの神々への信仰の中に、オリシャの神々への信仰の中に。ダホメの太鼓の中に、カンドンブレの中に。カーザ・ヂ・ナゴーでも、カーザ・ダス・ミナスでも。

第4部 ブンバ・メウ・ボイ——サンルイスを彩る魔法の儀式

第15 アーラ 「タンボール・ヂ・クリオウラ(植民地風の太鼓)の踊り」

タンボール・ヂ・クリオウラは、主に奴隷の子孫に受け継がれているアフリカ系の踊りで、聖ベネゼート(ベネディクト)に捧げる儀式として行われる

第 16 アーラ「フォウゲードス(聖人の祝祭)の爆発」

サンルイスでは年中、各種の聖人の祝祭が行われ、音楽、歌、踊り、色、詩にあふれた、郷土の伝統美が花開く。

第 17 アーラ(バイアーナ)「極彩色の民俗」

今回、バイアーナたちは、ブリチ(オオミテングヤシ)の繊維の編物生地の衣装を着用し、回り、揺られて、何十本ものカラフルなりポンを踊らせて、サンルイスの民俗風習の二面性、すなわち美と魔力を存分に表現する。

ムーザ・ダス・パシスタス シャルレーニ・ヴァウニース「極彩色の美」

第 18 アーラ(パシスタ)「ブンバ・メウ・ボイが私を踊らせる」

6月に行われるブンバ・メウ・ボイの祭りは、音と感動と色が混交して魅力的な光景を構成する伝統行事である。

インテールプレチ(プシャドール) ネギーニョ・ダ・ベイジャ・フロール「アーモ(ブンバ・メウ・ボイの歌手)」

ハイニャ・ヂ・パテリア ハイッサ・オリヴェイラ「100年の伝統を持つ至高の刺繍芸術」

第 19 アーラ(パテリア)「色とりどりのソタッキ(スタイル)」

ソタッキは、ブンバ・メウ・ボイの伝統を受け継ぐ民俗グループ特有のスタイルである。ベイジャ・フロールは、マラニャオン流のソタッキを、ニローポリスのパテリアの正確なリズムと力強さで表現する。

第 20 アーラ「花開く6月祭」

サンルイスのフェスタ・ジュニーナでは、マトラカ、ザブンバその他の楽器からなる大編成のオーケストラがリズムを刻み、いくつものブンバ・メウ・ボイのグループが練り歩く。

第 21 アーラ「父フランシスコと母カチリーナが踊りの輪に加わる」

妊娠中のカチリーナは牛タンが食べたくて仕方がない。それを見かねたフランシスコは、牧場主のお気に入りの牛を殺してしまう。後に、牛が蘇り、この奇跡を祝う祭りが行われる。

第 22 アーラ 「ボイのシニャジーニャ(若女将)の色彩」

ブンバ・メウ・ボイの祭りは、18 世紀から受け継がれる伝統行事で、マラニャオンの人々と旅行者たちをサンルイス中のそこかしこに繰り広げられる喧噪の中に巻き込む。

第 23 アーラ 「この喧噪の中に遊べ」

マドリ・デウス地区を本拠地とする団体「バヒーカ・ド・マラニャオン」は、歌、踊り、文学、手芸、路上演劇等、様々な芸術表現を行っている。

第 24 アーラ 「綿密に仕掛けられた官能」

コンシータ・ブラーガが企画した、ニナ・ホドリゲスのブンバ・メウ・ボイには、この上なく美しいインディオの女性たちが登場する。

第 25 アーラ 「歌の震動・感動」

1959 年にフランシスコ・ネイヴァが立ち上げた、民俗グループ・ブンバ・メウ・ボイ・ヂ・アイシャーは、美しい衣装やよく練られた振付を披露し、多くの才能、美、喜びを世に送り出した。

第 26 アーラ 「カズンバーが見たい」

1988 年にボイの仕掛け人ジョゼ・ヂ・ジェズース・フィゲイレド(通称ゼ・オリニーヨ)の仲介のもと、ハイムンド・ミゲウ・フェヘイラ、ジョアオン・マデイラ・ヒベイロらが設立した、ブンバ・メウ・ボイおよびタンボール・ヂ・クリオウラ文化協会ウニードス・ヂ・サンタ・フェは、「ブラジルのダイヤモンド」と評価されている。(「カズンバー」はブンバ・メウ・ボイの脈絡で登場する妖怪キャラクター)

第 27 アーラ 「重装備の戦士たち」

ソタッキ・ダ・イーリャのスタイルで行われるマイオーバのブンバ・メウ・ボイは、「マイオベイロス(マイオーバの実践者たち)」とともに聖ジョアオンを祭り上げるべく、ボイを通りに引き回す形態で祝祭を行う。

第 28 アーラ 「黄金の軍団」

ソタッキ・ダ・イーリャのスタイルで行われるマラカナン・ブンバ・メウ・ボイは、サンルイス市で 100 年の歴史をもち、マラニャオン州内で見ても、最大級かつ最も知名度のあるグループの一つである。

第 29 アーラ 「ブラジルのダイヤモンド」

ゼ・オリニーヨ、ハイムンド・ミゲウ・フェヘイラ、ジョアオン・マデイラ・ヒベイロらが設立した、ブンバ・メウ・ボイ、ウニードス・ヂ・サンタ・フェは、マラニャオンおよびブラジル全土の民俗史上に大きな足跡を残し、「ブラジルのダイヤモンド」と評されている。

第4山車「ブンバ・メウ・ボイ——サンルイスを彩る祝祭の魅力」

サンルイスの文化は、マラニャオンの芸術表現のゆりかごであり、その最たるものがブンバ・メウ・ボイである。今回の山車には、ロバート一家の指揮下、ボイ・ヂ・モーホの実践者が60名参加する。

第5部

第30アーラ「涙の宮殿の呪い」

聖ジョアオン協会の面前のフォーア13チ・マイオ(「5月13日通」)にはかつて、3階建ての建造物が存在した。そこが呪われた館であるとの噂が広まり、「涙の宮殿」と呼ばれるようになった。

第31アーラ「オーリオ・ダグア(海の日)海岸の伝説」

インディオのリーダーであるイタポラマの娘の涙から、今日まで海に注ぐ湧水が生じたという伝説がある。それがサンルイスにあるオーリオ・ダグア(海の日)海岸の名前のもととなっている。

第31アーラ「ポンタ・ヂ・アレイア(砂の岬)、イナ王女」

マラニャオンの人々の考えの中には多くの伝説が深く根ざしている。その中でも、ポンタ・ヂ・アレイア(砂の岬)の城に住むという水の王女イナの幻想的な話は、ひととき耳目を惹く。

第33アーラ「魔法の蛇」

サンルイスの地下に魔法の蛇の胴の一部が埋まっているという。やがて頭と尾が合体してこの怪物は復活し、島に巻き付いて沈めてしまうのだという。

第34アーラ「ポルトガルの勝利とグワシエンドウーバの奇跡」

サンルイスでのポルトガルとフランスとの間の戦闘の中、サンタ・マリア・ヂ・グワシエンドウーバ砦の前で、一人の女性が黄金色に輝く光に包まれて、砂や岩を砲弾に変えたという。

第35アーラ「マンゲーダの隠れた犯罪」

19世紀の終盤に、マンゲーダと呼ばれる幽霊がサンルイスを恐怖に陥れた。後にそれは、密輸業者たちが夜中の人目を避けるために流した嘘と判明した。

第36アーラ「アナ・ジャンセン—恐るべき支配者」

アナ・ジョアキーナ・ジャンセン・ペレイラは、配下の奴隷に対する非人道的な扱いでサンルイス中に悪名高い。彼女のために命を落とした奴隷たちは、幽霊となって19世紀のサンルイスの夜を徘徊した。

第5 アーラ 「サンルイスの人々のたくましい想像力」

サンルイスの地理的条件に理由を求める説もあるが、人々の創造には伝説があふれ、魑魅魍魎の話に事欠くことがない。

第6部

第37 アーラ 「不滅の人間国宝」

芸術家たちのゆりかご、詩人たちの土地、サンルイスは、ブラジル文学のショーケースである。ブラジルで最も優れたポルトガル語を話し、書く街との評判もある。

第38 アーラ 「詩に表されたサンルイス」

マラニャオンのサンルイスは、イーリャ・ド・アモール(愛の島)、アテナス・ブラジレイラ(ブラジルのアテネ)、シダーヂ・ドス・アズレージョス(タイルの街)、カピタウ・ブラジレイラ・ダ・クルトゥーラ(ブラジルの文化首都)等々の韻文詩や散文詩に詠まれた。

第39 アーラ 「口頭伝承を今に伝えるコルデウ」

リテラトゥーラ・ヂ・コルデウは、韻文詩で書かれる大衆文学で、口頭伝承を起源とし、小冊子の形態で発行されるもので、今日においても、サンルイスの道端やフェイラ(市)で売られている。

第40 アーラ 「緑と黄色のアテネ」

古代ギリシャのアテネが知識の中心であったことになぞらえて、サンルイスは「ブラジルのアテネ」と呼ばれる。上流階級の子弟にヨーロッパへの留学経験者が多いことにも、これが現れている。

第41 アーラ 「裏庭のステレオ——人気のジャマイカ音楽」

レゲエは世界中に広まった人気の音楽ジャンルで、マラニャオン州でも流行した。

第42 アーラ 「ラジオからはご機嫌なレゲエ」

レゲエは、ラスタファリ運動の影響下にジャマイカで発生した音楽ジャンルである。優れた音楽を愛する人々をとらえ、サンルイスにも根付くこととなった。

第6 山車 「ブラジルのアテネ、ブラジルのジャマイカ:大芸術家たちの故郷につけられた通称」

韻文詩、散文詩、文筆家、学者、高名・無名の思想家たちを抱える特別な場所であるサンルイスは、芸術家たちのゆりかごであり、ブラジル文学の巨大なショーウィンドーである。

第7部

第 43 アーラ 「植民地時代の道をゆくヴィラ・ラタス(「缶返し((雑種犬))」という名のお祭り集団)」

ヴィラ・ラタスは、1933 年に 15 名ほどの遊び人が設立した、マラニャオンのカーニバル・グループである。

第 44 アーラ 「道端やダンスホールでの熱狂」

伝統的なブロッコと呼ばれるグループは、各チーム固有のリズムと、プリント生地を用いた派手な衣装に特徴がある。

第 45 アーラ 「クルース・クレード・チアーボ(オーマイデビル!)」

クルース・チアーボはサンルイスの路上で行われていた昔のカーニバルに登場するキャラクターで、赤い服、背負った大きな十字架、顔に着けた面、角、三叉の槍が特徴である。

第 46 アーラ 「イーリャ・ド・アモール(愛の島)の仮面」

仮面を着けた者たちは、ヨーロッパの贅沢な衣装をモチーフとした扮装をしたカーニバルのキャラクターである。

第 47 アーラ 「明るいフォフォンイス(騒ぎ屋)が街を彩る」

フォフォンイス(騒ぎ屋)もマラニャオンのカーニバルにつきもののキャラクターである。彼らはぶかぶかのオーバーオールを身に着け、「ウーララー！」の掛け声で祭りを賑やかし、人々を盛り上げる。

第 48 アーラ 「サンルイスの将来は鉱物によって輝く」

ボーキサイトとは、商業利用面での分類に沿って言えば、酸化アルミニウムをふくむ鉱石である。マラニャオンには豊かなボーキサイト鉱脈が存在し、この州都の将来に光明を見せている。

第 49 アーラ(パイアーナス) 「アズレージョ(タイル)の街」

サンルイスはアズレージョ(ポルトガル風のタイル)の街である。サンルイスに現存する 18 世紀・19 世紀の建造物は、その独特な建築様式から世界遺産にも指定された。

第 50 アーラ(ヴェーリャ・グワルダ) 「年月が守った歴史」

2012 年 9 月 8 日に、サンルイス市は設立 400 年記念を迎える。その記念式典が本日サブカイド始まる。「通りの女神」によって練り上げられたカーニバルによって。

第 1 パシスタ カッシオ・チアス 「カーニバル精神」

第7山車「歴史的なサンルイス、そして、ジョアオンの傑作」

今こそ、マラニャオンの不思議な詩＝サンルイスの設立 400 年を祝う時だ！そして、ニローポリスのベイジャ・フロールはまた、サンルイスの優れた息子にして 2011 年に亡くなったジョアンジーニョ・トリンタを称える。そのために、1989 年に物議をかもした「物乞いのキリスト」を再建し、通りに登場させる。